様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２９ 年　 ８ 月 ３０ 日現在

機関番号：３３２０２
研究種目：基盤研究(B)（一般）
研究期間：2013～2016
課題番号：２５２８９２１２

研究課題名（和文）琉球の近世計画村落形成に伝統的祭祀施設と村抱護が果たした役割と意味に関する研究

研究課題名（英文）A Study on the Roles and Meanings played by Planted Forests "Ho:go" and Traditional Ritual Facilities in Ryukyu Early Modern Planning Village Formation

研究代表者
浦山　隆一（URAYAMA, TAKAKAZU）

富山国際大学・現代社会学部・客員教授

研究者番号：１０４６０３３８

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　12,600,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、明治期の地籍図写し並びに昭和30年代の一筆調査資料を集約し、韓国・済州大学所蔵の未公開米軍航空写真(昭和20年)等を収集した。その上でデーターを重ね合わせて景観復元図を作成し、現地調査を行った。その結果、近世期に発生した計画的「格子状」集落の地形的立地特性から見た村落の空間構造に村抱護や御嶽がどの様に係わっていたかがほぼ解明された。事例として、近世期に「村立て」した琉球列島の83村落から景観復元可能な35村落を抽出し、二類型・5分類にて理解可能であることを示した。

研究成果の概要（英文）：In this research, we gathered "perceptual map" in the Meiji Era and " Perceptual Survey Data" in the 1950's and Jeju University in Korea gathered aerial photographs taken by the US military in 1945. On top of that, data was superimposed to create a landscape restoration map, and a field survey was conducted. As a result, it was almost clarified how Planted Forests " Ho:go" and Utaki were involved in the village's spatial structure as seen from the topographical location characteristics of the planned "latticed" settlement that occurred during the early modern period. Specifically, we extracted 35 villages whose landscape can be restored from 83 villages of the early modern Ryukyu archipelago, and showed that they can be understood by two types and five categories.

研究分野：工学

キーワード：琉球列島　計画的村落　集落空間構成　村抱護　御嶽　村立て　地形的条件　立地

１．研究開始当初の背景

これまでの村落空間構造に関する研究は、家屋構造や村落空間の構成原理、聖域の構造に関する研究などの視点から「集落の空間構造」を明らかにしようとする試みであった。しかし、これらの研究は空間構造を構成する個別要素の検討にとどまり、空間構造を構成する要素を複合的に取り上げ、近世計画村落（井然型集落）形成における村抱護・お通し御嶽・神アシアゲ・殿等の集落空間構造に係わる「役割」や集落形成上の「意味」について問われることがなかった。

琉球の伝統的集落の内部構造は「腰当（クサテ）」思想と呼ばれる独特の形成理念に基づいて村建てが行われた。「クサテ・ムイ」は集落の背後にある腰当森のことであり、近世計画村落の空間構成はこの腰当森と村落周辺にある拝所群を結ぶ抱護林帯によって村の境域が決められていた。抱護林は琉球王府時代の宰相であった蔡温が、風水の論理を育林に応用した際に「抱護」の概念を提唱し、それが一般に広まって作られたものと考えられる。同様に近世計画村落の形成過程において新しい知識として琉球島嶼部型風水説が村落計画に応用されたと思われる。沖縄の村落における伝統的祭祀を行う場所は「御嶽（ウタキ）」または「拝所（ウガンジュ）」と呼ばれる。

浦山らは「沖縄の集落空間における伝統的人工林「抱護」の形態と機能に関する研究 」（基盤研究Ｂ・平成 21-23 年度）において、沖縄の集落に過って共通して存在した村抱護林の現状実態と消滅過程の調査を通して、抱護林の形態や位置関係から、その多義的機能について追求してきた。その結果から集落の背後にある「腰当森」は風水的近世計画村落形成のための目的を持った村抱護林の一様態と理解された。また村落の移動に伴う新たな祭祀施設(拝所)の創設も何らかの意味で風水的集落空間構成の重要な役目を担っていると推定された。

同時に行われた「沖縄の固有文化が持つ環境観と空間形成技術から見た集住環境の構成原理に関する研究」（基盤研究Ｂ・平成 22-24 年度，代表者：鎌田誠史）では沖縄全域での絵図資料・地図資料の収集がなされ、一筆地調査図、米軍撮影空中写真・米軍作成地図に加え、現在の地籍図・航空写真さらに明治期中期の「地籍図・測量図」が集められた。収集した地籍図、空中写真等を重ね合わせて、集落構成復元図を作成することにより「近世末期の村落」を地籍図上で正確に把握しうる状況となった。

これらの研究成果から、集落の成立に係わる「古島（御嶽）」「お通し御嶽」「神アシアゲ・殿」「井戸（カー）」「村抱護」等の近世計画村落形成における役割の問題に切り込めるようになった。

２．研究の目的

琉球国で近世碁盤目型の集落が成立したのは、地割制度が実行された 1737 年以降とする説に従い、琉球王朝の三司官・蔡温（1682～1761）らの指示のもとで、古島からの「集落の移動と村落再編に伴う計画村落の立地選定法則や空間形成原理」を明らかにしたいと考えた。

このような近世期に「村立て」された琉球の多くの村落は、琉球王府によって村立てされたものと、王府の役人や地理師の指導を受けた村人によって村立てされたものとに大別される。これらの近世計画村落が、現在ある沖縄の村落の構造的起源となっている。一方で、その空間形成がいかなる技術によるものかについての研究は皆無に等しい。また、現在まで沖縄の村落研究は、主に居住域の地割形態などを対象として進められてきたが、琉球列島の広域の村落を対象として、居住域の周囲も含めた村落全域の空間構成を問題とし、また、地形的立地条件がいかに関わったかについては、触れられて来なかった。

本研究においては、近世期に新たに創建・再編される琉球列島各地の村落を抽出し、地形的立地条件との関係に注目しながら類型分類を行って、各村落の空間構成を詳しく分析することを目的としていく。なお基礎資料の乏しい沖縄において、近世期の村落の空間構成を解明することは困難であるが、近世末期から近代初期にみられた村落の空間構成は共通して昭和20年頃まで、大きな変化もなく維持されていた事から、第二次世界大戦前の村落の状況を復元的に分析することで、近世期の村落空間構成を知る手がかりと考えた。

以下のような具体的な目的を設定している。

（1）移動村落成立に伴う集落内の「お通し（遥拝）御嶽」・神アシアゲ・殿の場所性に着目し、その立地性や環境特性から集落計画の起点的役割や計画全体を見通す視点場の役割を担っていたと仮説設定して現地確認において立証し、祭祀的世界観を含めて、明治期の地籍図や一筆調査資料に基づいて村落形成過程の論証を行う。

（2）前回の科研Ｂ「沖縄の固有文化が持つ環境観と空間形成技術から見た集住環境の構成原理に関する研究」において、調査収集した資料に基づいて集落構成復元図を作成する。さらに新たなる地域の先島諸島の明治期資料の発掘に努める。その上で、近世末期の村落を正確に把握し集落空間構成要素間の関係性の分析と時系列的形成過程の仮説モデルを提案する。

(3)宮古諸島における古島と移動村落形成の空間構成調査を行う。宮古諸島における集落研究の蓄積は非常に少ない。そこで狩俣・西原・池間のミクロ単位での集落調査を試みた上で、移動前の集落遺構と御嶽の関係、複数の御嶽と集落形成との関係を把握し、現地調査から推定近世集落の集落形成規範を導く。

(4)一筆調査資料（昭和 30 年代）からの「村

抱護林の推定復元図」の作成は、地理学における地籍図解析の手法により、歴史資料が失われた沖縄本島の集落の一筆調査図の有効性を再度、検討し、村の地目「保安林」に着目して地籍形状の観察から「村抱護」の推定域のデーターマップを作成する。

(5)多良間島・波照間島・宮古島等の集落と御嶽内のフクギ樹齢分布調査を行う。御嶽林と抱護林は一体として近世集落成立期には機能していたが、明治期以降には樹林が失しなわれる時期があった。しかし戦後、御嶽林が計画的に植樹された経緯があり、その空間形成に果たした植生学的形成過程について現地における聞き取り調査と現地実測で、推定樹齢から集落及び聖域の成立と形成過程を把握する。

（6）抱護林研究において、沖縄の抱護林や韓国の裨補林の成立には「中国の風水林」の影響あったことが判明している。韓国の近世期成立の集落調査のみでなく、村落と裨補林の役割を調査する。また中国・広東省の「客家囲龍屋」と風水林も含めた集落調査を行い、琉球の近世計画村落の空間秩序性を視野に入れて比較検討する。

３．研究の方法

本研究では、村抱護とその抱護林帯の形成を促した御嶽・お通し御嶽・拝所群に着目して論を構成するが、その前提となる事実性の根拠を明治期の地籍図（近世末期）及び一筆地調査資料（明治期の地籍と大きな変化なし）に求め、その妥当性を現地調査や歴史・郷土資料で補完する作業を行う。その上で、村落の形成過程における集落発生の計画的起点や集落空間構成の全体像を俯瞰する展望性を持つ視点場を伝統的祭祀場に求め、地割や道路がどのように計画されたかについて村落形成過程の原点に戻って考える。

(1)近世に発生した計画的村落の形態類型：近世期（1648～1874に創建・移転）に村立てされた琉球列島各地の村落を対象に、調査・記述・比較・分類・論理化する手順で分析を進める。村落の抽出には『球陽』(1743～1745)の記述と郷土各地域の郷土史を参照した。対象村落の条件としては、昭和30～50年頃に作成された一筆地調査図に加えて、戦前に撮影された米軍空中写真が入手可能な村落とする。地域的には、沖縄本島14、久米島3、宮古島12、石垣島5の合計35集落を選定した。それらの村落は、戦前前の景観復元図を作成するために、ムラ域の境界・道・川・御嶽・村井戸・拝所・墓が記入した上で、ブロックダイヤグラム化し、地形的立地条件が付加されて類型化が試みられる。

(2)近・現代における村落空間変容分析：①沖縄本島・旧勝連間切における3集落の空間構成の復元では明治35年の地籍図を用いて復元図を作成し、その空間的特徴を捉える。次に明治期の復元図を昭和20年頃の米軍撮影空中写真、昭和42～57年作成の一筆地調査図、住宅地図と比較することで、明治期から現在に至る村落空間の変遷を明らかにする。(対象村落は南風原村・平安名村・内間村）　②沖縄本島南部における「格子状集落」の構造と失われた「村抱護」の関係分析では、沖縄本島において名称「ホーグ（抱護）」が確認できる島尻地域に着目する。八重瀬町・安里集落と南城市玉城・前川集落の2か所で「横一列型」の格子状街区群の立地と構造を確認するために、地籍図による明治期の村落空間を復元させる。さらに一帯を取り囲む「ホーグ」の明確な林帯を地籍図に浮かび上がらせ、現地確認を行う。　③多良間島の村落発展過程と村抱護では、仲筋・塩川集落の道を隔てて隣接する2集落の空間的特性を分析するとともに、集落と村抱護の樹林帯（1742年に白川氏恵通が造成）との空間的位置関係を考察する。そのために1899(明治32)年の「土地整理事業」の地籍図及び土地台帳をもとに明治期の村落空間の様子を明らかにする。また屋敷地や道路の変化を観察することで、不整形街区にも注目して近世以前に繋がる村落の姿も模索する。

(3) 宮古島北部における伝統的祭祀信仰が残る村落構造の解明と御嶽及び祭祀設群との関連性の分析：対象集落は宮古島市狩俣と西原である。「ウヤガン祭」で知られる狩俣集落は15世紀以前から移動することなく、同一場所に存在した。そのことは中世から近世・近代の村の空間的変遷を考察する好事例である。一方、「ウハルズ」信仰圏の西原集落は近世末期（1904）に分村移動によって成立した村であり、成立期から現在までの村域の空間構成の変容を理解するための事例である。分析手法としては、村落の祭祀施設の空間配置に着目して関係性を考察するため、御嶽・拝所・ムツゥ（元）等の村落の発生的場所の建築学的・植生学的・考古学的は複合調査を試みたうえで、明治期以降の地籍図及び土地台帳の分析から総合的な集落変遷史を描く試みに挑戦する。

(4) 御嶽及び集落の植生調査及びフクギ樹齢分布図作成から見た集落空間の形成過程：フクギは人によって植えられた樹種であり、植えられた年代推定が可能である。調査地は多良間島・塩川御嶽＆普天間御嶽、狩俣集落・磯津御嶽＆集落内全体、池間島・大主御嶽、大神島・ウプ御嶽、伊良部島の数か所とする。現地における幹周りと樹高の実測と測量図作成の上で、樹齢別に分布状態をプロットする。さらに、その分布から御嶽創設と御嶽林形成過程の類推を行う。

４．研究成果

琉球の近世期に創建・移動・再建された村落の空間構成の特徴を考究してきた。そして、これらの村落は近世期に「村立て」される際に、ある基点を拠り所としてその位置や領域が設定されており、それらの設定が村抱護とも密接に関係していたという、近世村落の計

画手法が明らかになった。また近世計画村落の立地選定や空間構成を、地形的立地条件との関係に注目して形態類型を行って空間構成を詳しく分析した。さらに蔡温の抱護の論理（風水の気を密封する手法）が地形や植林の環境形成手法として重要視されて、島嶼環境の沖縄における山地や村落の生活空間域を保全する技法として「抱護(内抱護・外抱護)」があった事も実証した。また琉球の近世計画村落(格子状集落)の空間構造を捉えるには、風水思想による環境形成手法「抱護」とは別に、集落構成原則である「格子状」街路の形態形成を解読する必要があった。その為の事実性の根拠を「土地整理事業期の地籍図・測量図(近世末期)」及び「一筆調査資料」に求め、その妥当性を現地調査・歴史文献・郷土資料で補完する作業を行った。

（1）地形的立地条件から見た琉球列島における村落の空間構造：近世期に「村立て」した 83 村落のうち、米軍空中写真と一筆地調査図が入手できた 35 村落を抽出した。そして抽出した各村落の景観復元図を作成し、どのような場所を選定して村が形成されているかといった地形的立地条件をもとに各村落の空間形態を分析した。その結果、原則として村落の一方（背後）のみに標高の比較的高い丘陵が分布する形態である「腰当型；（丘陵不離・丘陵隔離・斜面依拠）」と、村落の周囲が標高の比較的低い丘陵や小丘などが取り囲まれていたり、それらの間が人工的な林帯で補われていたりすることで村落のほぼ全周が囲われている形態である「抱護型；（丘陵抱護・林帯抱護）」の、大きく２つの分類を得た。さらに、それらの丘陵や林帯の村落との位置関係をもとに、５タイプに分類された。このように類型化した各村落の特徴について、立地選定、空間構成要素の配分やそれらの境界域などについて、詳細に明らかにした。そして＜丘陵不離タイプ＞と＜丘陵隔離タイプ＞の村落は、久米島を含む沖縄本島に多くみられたが、宮古島と石垣島にはみられなかった。＜斜面依拠タイプ＞の村落は、すべて宮古島にみられた。＜丘陵抱護タイプ＞は沖縄本島、宮古島、石垣島に広くみられた。＜林帯抱護タイプ＞は主に石垣島と宮古島にみられたが、一部沖縄本島と久米島にも見られた。また、各村落の「ムラ域」内については、自然地形を巧みに利用しながら、村落の地形的立地条件に応じて、共同体単位としての「居住域」と「生産域」とが配置されていることが明らかになった。ほかに、村の御嶽や村井戸等の重要な空間構成要素の配置が居住域・生産域の領域設定の範囲と密接に関係していることを指摘した。

（2）明治期の村落空間構成の復元と集落の変容：①旧勝連間切・南風原村（1726年頃移動；伝承）では、「保安林」と加筆された山林によって村落が囲まれる村落構造は風水思想に基づいた地理的な概念いわゆる「抱護」が存在した可能性が考えられた。また特徴として、居住域の井然型の地割形態や水路、村池の整備に加えて村落移動（村立て）の際の基点が存在したことや村域の存在、腰当森の山林が帯状に村落を取り囲む村抱護とも言える形態は往時における近世村落の村落計画手法が明確に表象されていると言える。　②南城市玉城・前川集落（1736年頃；移動）では、「横一列型」の格子状街区群の立地と形成に着目し、「格子状集落」の拡大過程を解明した。集落中央の面積が大きく不定型な宅地は，最も早期に移住者の子孫が居住してきた屋敷地に該当する。そこを軸に当初は上方に，後に下方に街区を拡大させて現在の集落構成となったと住民は認識している。集落の拡大はより急斜面で街区の造成を伴ったといえる．その過程において，東西方向の等高線に沿うような曲線の街路が設定されることになり，かつ，各屋敷地内にあまり高低差をつくらないようにすることで，自ずと南北方向の幅を狭くした宅地群「格子状集落」を形づくる「横一列型」街区が前提となったと想定された．③多良間島・仲筋＆塩川集落では、近世村落の成立と発展過程の解明を行った。1899年当時の多良間島の中心集落は、現在の位置よりも若干西側寄って映る。逆に塩川側の「抱護」林の周囲には、一定の幅で畑が広がっていたことが明治期の地籍図・土地台帳分析から判明した。また屋敷地や道路の特徴は、塩川側では東西方向に細長い街区に一列に屋敷地が並ぶ「横一列型」街区が多くみられるのに対し、仲筋川では「横一列型」街区が見られにくく、不定形かつ規模の大きい街区で占められていた。

（3）宮古島・狩俣集落の空間構造分析：狩俣は琉球王府下での「村立て」が進められる以前から，西側の旧根井間村と東側の旧狩俣村の両集落（現在は融合）を発達させてきた。狩俣集落一帯の地形的条件は，太平洋側の海岸からそびえ立つ丘陵群から西南側の海岸まで続く，緩やかな斜面上に立地している。丘陵群の西南側に，4～5段の明確な段丘面が確認された。これらの段丘面は，過去のさんご礁発達およびその礁池（イノー）へのたい積によって形づくられた。狩俣集落においては，当初は丘陵直下に，のちには高位段丘面に屋敷が設けられていく過程において，村の「宗家（ムトゥ屋）」と思われる根間家と狩俣家が尾根状の箇所を求めたことが想定された。そして，その後は谷状の箇所を両家以外の屋敷地が埋めていくような形で，現集落の大部分が形成されたと思われる。また，このような社会的関係を色濃く反映した屋敷地拡大のもとで，同集落の内部においては，非「格子状」の集落形態が目立つようになっている。集落の社会のヒエラルキー構造を色濃く反映したあることが判明した。

（4）御嶽林の形成とその植生構造：宮古島狩俣集落の磯津御嶽はフクギの巨木が群生しており、その多くが明和の津波（1771）以降に植生された事が分かった。宮古大神島の

御嶽のフクギは 300 年前の 1714 年頃に植えられたと推定される。宮古池間島も屋敷跡か生活場所に発生した人工林であろう。また波照間島のシサバルワーは植生状況（クロツグ）から集落跡と類推される。多良間島の塩川御嶽は巨石をイビとし、周囲を取り巻くフクギ群から成る。御嶽林も村抱護とほぼ同じ時期に造成されたと考察できた。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 30 件）
①鎌田誠史・山元貴継・浦山隆一・澁谷鎮明・齊木崇人「地形的立地条件から見た琉球列島における村落の空間構成に関する研究―近世期に発生した計画的村落の形態類型を通して―」『日本建築学会計画系論文集』査読有　2016、第 81 巻　第 716 号　11～21
②Bixia Chen, Yuei Nakama, and Takakazu Urayama：Dimensions and Management of Remnant Garcinia subelliptica Tree Belts Surrounding Homesteads - A Case Study from Two Villages on the Sakishima Islands, Okinawa Prefecture, Japan -『海岸林学会誌』査読有　2016、15 巻 2 号　1～8
③仲間勇栄．ジョン・マイケル・パーヴェス．陳碧霞,『林政八書』中の「山奉行所公事帳」：その和訳・英訳と内容分析．『琉球大学農学部学術報告』　2016．　第 62 号、15～59．
④仲間勇栄．ジョン・マイケル・パーヴェス．陳碧霞,「御差図控」『琉球大学農学部学術報告』2016、第 62 号．61～75．
⑤鎌田誠史「琉球列島における近世村落の村立て手法と空間構成」『しまたてぃ』　2016　No76、4～10、2016
⑥鈴木一馨「村獅子と村抱護」『しまたてぃ』2016　No 75、4～7
⑦仲間勇栄,「沖縄の村落と村抱護とフクギ屋敷林」『しまたてぃ』2016　No 77、3～6
⑧大川泰毅・藤川昌樹・浦山隆一・鎌田誠史「与論島朝戸・城集落における居住環境の類型に関する研究」　『日本建築学会大会学術講演梗概集（関東）』E-6,2015,93～94
⑨鎌田誠史「村抱護を有する近世集落の空間構成と村立ての原理―石垣の村々を中心に―」　『2014 年度　第 2 回研修会　沖縄県地域史協議会 研究報告書』2015、2～22
⑩山元貴継「戸籍図・土地台帳に記録された沖縄の村落―その構造と変化をめぐって―」『2014 年度　第 2 回研修会　沖縄県地域史協議会　研究報告書』2015、23～45
⑪鎌田誠史「間切番所が置かれた村落‘主村’の空間―近世末期の村落景観の復元―」『しまたてぃ』2015、No72、4～8
⑫山元貴継「多良間島にみる近世村落の成立・発展過程と‘抱護’林」『しまたてぃ』2015、No73　p4～8
⑬山元貴継「沖縄南部における「格子状集落」の立地と構造～地籍図から見た南城市城・前川集落～」『しまたてぃ』2015,No74　p4～8
⑭山元貴継・鎌田誠史・浦山隆一・澁谷鎮明、沖縄島南部における「格子状集落」の立地と構造－地籍図を活用した南城市玉城・前川集落の検討－、日本建築学会研究報告九州支部第 54 号 3（計画系）、2015、421-424
⑮鎌田誠史・浦山隆一・山元貴継・齊木崇人、近世期に村立てされた格子状村落の空間構成に関する研究－宮古島・伊良部島の村落を事例として－、日本建築学会研究報告九州支部第 54 号 3（計画系）、2015、417-420
⑯Chen,B. Nakama,Y. and Urayama,T. Planted Forest and Diverse Cultures in Ecological Village Planning: A Case Study in Tarama Island, Okinawa Prefecture, Japan. Small-Scale Forestry、査読有、2014、13(3)、333-347
⑰仲間勇栄「 蔡温の山林観―風水地理を応用した植林技術と集落景観づくりー」　『 山林』　2014、第 1562 号、2～10
⑱鎌田誠史, 山元貴継、浦山隆一, 澁谷鎮明、沖縄本島・旧勝連間切の近・現代における村落空間の特徴と変遷－村落空間構成の復元を通じて その 2－、日本建築学会計画系論文集，査読有　2014、vol.79,No.700, 1329-1335

〔学会発表〕（計 46 件）
①山元貴継「沖縄県宮古島・狩俣集落の空間構造分析－地形的条件および土地所有との関わりに注目して－」人文地理学会大会、京都大学、2016.11.12
②鈴木一馨,沖縄の村獅子の配置について，日本宗教学会第 74 回学術大会、創価大学、2015,9,5
③渋谷鎮明・山元貴継・浦山隆一・鈴木一馨、韓国農村の「村の林」と裨補概念―全羅北道馬耳山周辺地域を事例として―、人文地理学会、広島大学、2014.11.1
④浦山隆一「場所に刻印された土地の記憶―集落と御嶽（ウタキ）―」第二回学際シンポジウム「生き続ける琉球の村落」、沖縄県立美術館・博物館　2014.10.4
⑤山元貴継「格子状集落」の成立　－琉球村落のイメージへの再検討－、第二回学際シンポジウム「生き続ける琉球の村落」、沖縄県立美術館・博物館　2014.10.4
⑥鎌田誠史「生き続ける琉球の村落―村落計画（村立て）の原理」、第二回学際シンポジウム「生き続ける琉球の村落」、沖縄県立美術館・博物館　2014.10.4
⑦仲間勇栄「沖縄の御嶽林の形成とその植生構造」、第２回学際シンポジウム「生き続ける琉球の村落」、沖縄県立博物館・美術館、2014.10.4
⑧河合洋尚「中国客家地域における生命観と‘抱護’の思想」第二回学際シンポジウム「生

き続ける琉球の村落」、沖縄県立博物館・美術館、2014.10.4
⑨URAYAMA Takakazu　Ecological Outlook on Environment and Space Formation Technology of　Residence and Settlement：from Passive Design to Traditional Planted Forests “ Ho:go(抱護)”、9th nternational Forum on Ecotechnology 、Hotel OACity Kyowa　Miyako Island, Okinawa, Japan、2014.12.21
⑩仲間勇栄「琉球王朝時代における抱護の防風林帯の意味を考える」、沖縄県「防風林の日」、沖縄市農民研修センター、2014.11.6
⑪大川泰毅・鎌田誠史・浦山隆一、「与論島における城・朝戸集落の空間構成の特徴に関する研究」日本建築学会九州支部研究発表会、佐賀大学、2014.3.2
⑫山元貴継, 鎌田誠史, 浦山隆一, 澁谷鎮明、沖縄本島南部における「格子状集落」の形成　－南城市玉城・前川集落などを事例に－、日本地理学会春季学術大会、国士舘大学、2014.3.28
⑬SHIBUYA, Shizuaki, “Hougo” Concept of Feng Shui in Okinawa and Village Forest, Asian Geomancy (Pungsu, Fengshui, Husui)、Towards an harmonized approach for sustainable land management in Asia 2014 Workshop 、Seoul University, 2014 .1.15
⑭陳碧霞・仲間勇栄・浦山隆一：「沖縄的村落空間（東アジアにおける風水集落の景観構造及び風水樹に関する比較研究）」、国際シンポジウム「国際移民与客家文学術研討会」、中国・嘉応大学客家研究院、2013.10.10
⑮山元貴継、沖縄の近代土地台帳・地籍図に見る「災害」の記憶と対策、情報知識学会 第21回年次大会、お茶の水女子大学、2013.5.25
⑯仲間勇栄、「沖縄の御嶽林をどうとらえるか―植生・歴史・文化の視点から―」公開シンポジウム　琉球列島の自然・文化・環境―人文学と自然学の対話―、琉球大学国際沖縄研究所中期計画達成プロジェクト．沖縄県立博物館・美術館、2013.12．1
⑰鈴木一馨、沖縄本島における村獅子の分布について、日本宗教学会第72回学術大会、國學院大學、2013.9．8

〔図書〕（計12件）
①澁谷鎮明、ジオブック（ソウル）『東アジア風水の未来を読む』(韓文：共著) 2016、384-397
②鎌田誠史、浦山隆一、齊木崇人・澁谷鎮明・仲間勇栄・安里進・山元貴継・河合洋尚・平良啓：富山国際大学現代社会学部、第二回学際シンポジウム　『生き続ける琉球の村落―沖縄の村落観を問いなおす―』2015、1～75
③仲間勇栄・来間玄次、『おきなわ福木物語』、沖縄県緑化推進委員会 2015、1～102
④山元貴継、関西大学出版部、『住まいと集落が語る風土 －日本・琉球・朝鮮－』共著、2014、69-100
⑤鎌田誠史、浦山隆一、齊木崇人・澁谷鎮明・仲間勇栄・高良倉吉・山元貴継・鈴木一馨、富山国際大学現代社会学部、学際シンポジウム『生き続ける琉球の村落―固有文化にみる沖縄の環境観と空間形成技術―』、2013、1～77

６．研究組織
(1)研究代表者
浦山　隆一（URAYAMA　TAKAKAZU）
富山国際大学・現代社会学部・客員教授
研究者番号：10460338
(2)研究分担者
渋谷　鎮明（SIBUYA　SIZUAKI）
中部大学・国際関係学部・教授
研究者番号：60252748
仲間　勇栄（NAKAMA YUUEI）
琉球大学・農学部・名誉教授
研究者番号：70142362
鎌田　誠史（KAMATA　SEISI）
武庫川女子大学・短期大学部・准教授
研究者番号：70512557
山元　貴継（YAMAMOTO　TAKATUGU）
中部大学・人文学部・准教授
研究者番号：90387639
齋木崇人（SAIKI　TAKAHITO）
神戸芸術工科大学・芸術工学研究科・教授
研究者番号：90195967
平井　芽阿里（HIRAI　MEARI）
中部大学・一般共通教養センター・講師
研究者番号：70590438
(3)連携研究者
鈴木　一馨（SUZUKI　ITUKEI）
公益法人中村元東方研究会・研究員
研究者番号：50280657
陳　碧霞（BIXIA CHEN）
琉球大学・農学部・助教
研究者番号：50606621
河合　洋尚（KAWAI HIRONAO）
国立民族学博物館・研究戦略センター・助教
研究者番号：30626312
石井　龍太（ISII　RYUUTA）
城西大学・経営学部・助教
研究者番号：00712655